

ラムス主義レトリックとデカルト ——近世フランスにおける自由学芸改革の一側面——

久保田 静香

はじめに

哲学書を初めてフランス語で書いたのはデカルトではなくラムスだといわれることがある¹。何をもって「哲学書」とするかは哲学をいかに定義するかにより異なるが、16世紀の人文主義者ペトルス・ラムスは書記言語の選択以外の点においても、デカルト思想を先駆ける試みをおこなったとして、長らく研究者たちの関心を引いてきた²。「方法」、「理性」、「自然の光」、「マテシス」、「反スコラ」、「反アリストテレス」、「反権威」、「一般から個別へ」、「単純から複雑へ」といった表現はすべてラムスの著作を特徴づけるキーワードであると同時に、デカルト哲学を語る際にも必ず援用されるものである。本稿もラムスとデカルトの関係を探る一連の研究のもとにあるが、これまでは主に両者の「哲学ないしはディアレクティック」に対する取り組みや「方法」概念の類縁性の指摘に偏りがちであったことを踏まえ、あえて「レトリック」という分野に焦点をあてて両者の特質を明らかにすることを目指す。そのために、まずはラムスの生涯を追うことでラムスとその協力者たちによるパリ大学学芸学部改革がいかなるものであったかを把握し、それらの改革がいかにして彼ら自身による伝統的レトリック理論の改革に力を得ていたものであったかを確認する。さらに、「ラムス主義レトリック」および「ラムスとデカルトとの影響関係」をめぐる代表的な先行研究を概観したうえで、デカルトが「レトリック」をいかなるものとしてみなしていたのかをテキスト中に探り、ラムス主義レトリックとの対比を試みることにする。

デカルト（1596-1650）の80年ほど前に生まれ、サン・バルテルミ虐殺事件のさなかで非業の死を遂げるまでのラムスの生涯は、16世紀フランスの激動期にあつて、まさしく波瀾万丈であった。怒れる若者の気質をむきだしにし、行動する人文主義者として中世以来伝統的スコラ学の牙城であったパリ大学の権威に真正面から立ち向かい、みずからの信条に従ってカトリックからプロテスタントへと改宗したラムスは、齢を重ねるにつれ、熱狂的支持者だけでなく頑迷な敵対者の数もまた増しながら、栄光と苦境をともにその極限の状態において味わった。ラムスの改革が、机上で考えられただけのものではなく、当時の大学の現場でいかに生きられたものであった

¹ Michel DASSONVILLE, « L'originalité de la *Dialectique* de Pierre de La Ramée », Chapitre Premier de l'Introduction à Pierre de La Ramée, *Dialectique* (1555), Genève, Droz, 1964, p. 11 : « [...] il [=Ramus] fut le premier à écrire une œuvre originale qui illustre la philosophie d'expression française. » (かぎカッコ内補足筆者)

² 古くは Émile SAISSET, *Précurseurs et disciples de Descartes*, « II. La réforme de Ramus », Paris, Didier, 1862, pp. 59-80 が代表的。

かを示すため、以下、その生涯³をやや詳しく辿りたい。

1. ラムスの生涯とパリ大学学芸学部改革

ペトルス・ラムス⁴は1515年、フランソワ一世即位の年に、ピカルディのオワーズ県境キュ・Cuts⁵で生まれた。父は労働者、母も生まれが貧しく、ピエール少年は極貧生活を余儀なくされた。もともと貴族の血を引く家系であったが、祖父の代の1468年、当時ラ・ラメー家が居住していたリエージュ司教領がブルゴーニュ公国シャルル豪胆公により占拠され、一家は無一物でピカルディへと落ちのび、ピエールの祖父はそこで炭焼き労働者となったのである。こうした家庭的非運におかれながらも、ピエールは早くから勉学への並々ならぬ熱意をあらわにし、8歳にして単身徒歩にてパリへの上京を試みるほどとなった。この無謀な試みは貧苦のあまり二度にわたって頓挫するが、運よく12歳のとき、パリのナヴァール学院 Collège de Navarre に在籍していた貴族の子弟の学僕として雇われることが決まる。これにともなって、念願のパリ大学への登録も許可され、学芸学部 Faculté des arts⁶の講義の聴講も可能となった。とりわけナヴァール学院で得た知己と経験は、彼のその後の人生に決定的な影響を及ぼすことになる。ひとつはシャルル・ド・ロレーヌとの出会いであり、もうひとつは学芸学部の哲学講義への失望であった。

シャルル・ド・ロレーヌ (1524-1574)⁷は、宗教戦争 (1562-1598) におけるカトリック派の首領を務めたギーズ公フランソワ (1519-1563) の弟であり、且つフランソワ二世の王妃メアリ・スチュアート (1542-1587) の叔父でもあり、さらには1547年に枢機卿に任命されたことから、

³ ラムスの死後ほどなくして、弟子たちによって相次いで三冊の伝記がラテン語で書かれた。Jean Thomas FREIGE, *Petri Rami vita*, Bâle, J. Perna, 1575 ; Théophile de BANOS, *P. Rami vita*, Francfort, A. Wechel, 1576 ; Nicolas de NANCEL, *Petri Rami Vermandui*, Paris, Claudius Morellus, 1599. 近代以降では Charles WADDINGTON, *Ramus (Pierre de La Ramée), sa vie, ses écrits et ses opinions*, Paris, Librairie de Ch. Meirueis et compagnie, 1855 が現在でも最もよく参照され、本稿でももっぱら Ch. WADDINGTON に依拠する。必要に応じて他書を参照し、その際は出典を明記する。他には Charles DESMAZE, *P. Ramus, professeur au Collège de France, sa vie, ses écrits et sa mort (1515-1572)*, Paris, J. Cherbuliez, 1864 ; Frank Pierrefond GRAVES, *Peter Ramus and the Educational Reformation of the Sixteenth Century*, New York, The Michigan Company, 1912 など。

⁴ フランス語名はピエール・ド・ラ・ラメー Pierre de La Ramée。パリでの勉学開始をきっかけに Petrus Ramus というラテン語名を使用し始めた。ただし Ramus という綴りはラテン語表記としては不正確で、本来ならば Rameus ないしは a Ramo とすべきとされる。F. P. GRAVES, *op. cit.*, p. 19, note 2.

⁵ Cust, Cultia, Cusia, Cus, Cuth, Cut など文献によって綴りの違いがみられるが、現在は正式名称として Cuts が採用されている。F. P. GRAVES, *op. cit.*, p. 19, note 4. Cuts は人口 1000 人未満 (2010 年時点) の小村で、コンピエーニュ Compiègne の北東 20 キロほどに位置する。ジャン・カルヴァン (1509-1564) が生まれたノワイヨン Noyon からは南東に 10 キロほどである。

⁶ ヨーロッパの旧制度の大学における「学芸学部」のカリキュラムは、おおむね現在の中等教育のそれにあたる。16 世紀当時は 8～9 歳の生徒もいた。12 歳で入学したラムスはスタートが遅れたといえる。

⁷ Collette DEMAIZIÈRE, « Le cardinal de Lorraine protecteur de Ramus », in Y. Bellanger (éd.), *Le Mécénat et l'influence des Guises*, Paris, H. Champion, 1997, pp. 365-380.

16 世紀後半のフランスにおいて政治的にも宗教的にも絶大なる権勢をふるった人物として知られる。ナヴァール学院時代の学友ラムスの才能を認めてその強力な後ろ盾となったが、1561 年ごろラムスがプロテスタントに改宗したことがわかるととたんに庇護を打ち切った。ラムスの人生のさまざまな局面において、事実上、その命運を分けた人物でもある。

このシャルル・ド・ロレーヌと出会ったナヴァール学院は、1304 年にフィリップ四世（在位 1285-1314）の王妃ジャンヌ・ド・ナヴァール（1271?-1305）によって建てられた伝統あるコレージュとしてパリでもとりわけ名高かった。少年ラムスはここで受けたアリストテレスの権威一辺倒の哲学講義に深く失望し、そのことが彼のその後の学問傾向を決定づけたのである。ここでいわれる「哲学」とは、当時の学芸学部で教えられていた自由七学科（文法学、レトリック、ディアレクティック、代数、幾何、音楽、天文学）のひとつの「ディアレクティック」のことであるが、中世末期から大学で異常な発達をみせたこの「ディアレクティック」はしばしば「論理学」と同義におかれ、アリストテレスの絶対的権威のもと、悪名高きスコラ学⁸としてラムスの時代にいよいよ猛威をふるっていた。すでにルネサンス人文主義者たちの痛烈な批判的となっていたこのスコラ学に対して嫌悪感をさえ抱いた若きラムスは、その不毛性と無用性を槍玉に挙げて、パリ大学の権威に徹底抗戦をしかけるようになっていくのである。

ラムスが反スコラ学・反アリストテレスの構えを初めて公にしたのは、1536 年の学芸学部学士試験に臨んだ際である。扱うテーマは受験者の自由にまかされており、このとき 21 歳だった若きラムスを選んだのは「アリストテレスによって言われたことはすべて誤りである *Quaecumque ab Aristotele dicta essent commemoritia esse*」という大胆不敵な論題であった。丸一日に及ぶ激論の末、ラムスの論証に完全にやりこめられた試験官側はやむなくラムスを合格とした。翌 1537 年に修士号を取得すると、まずはル・マン学院⁹で、ついでアヴェ・マリア学院¹⁰にて教鞭をとった。最高の友人オメール・タロン¹¹と出会ったのがこのアヴェ・マリア学院である。極めて規模の小さなこのコレージュにおいてラムスはより多くの自由を享受し、自分の理想とする人文主義的カリキュラムを敢行した。そこではギリシア語とラテン語の著作が同時に扱われ、哲学は古典古代文学作品と結びつけて教えられた。この新しい教授方法はすぐさ

⁸ スコラ学の実態については、月村辰雄、「16 世紀フランスの学芸の世界」、樺山紘一他編、『ノストラダムスとルネサンス』、岩波書店、2000 年、75-98 頁を参照。

⁹ ル・マン学院 Collège du Mans は 1526 年に開校。創設者はリュクサンブール枢機卿（1445-1519）。パリのサント・ジュヌヴィエーヴの丘近くにあった。1639 年から 1641 年までアントワヌ・アルノー（1612-1694）も教えていたことがある。Aloyse Raymon NDIAYE, *La Philosophie d'Antoine Arnauld*, Paris, Vrin, 1991, p. 12.

¹⁰ アヴェ・マリア学院 Collège de l'Ave Maria はユバン学院 Collège de Hubant の別称。ジャン・ド・ユバン Jean de Hubant により 1336 年に創設。サント・ジュヌヴィエーヴ修道院の保有地にあったが、1763 年にルイ・ル・グラン校に組みこまれた。Élisabeth PELLEGRIN, « La bibliothèque du Collège de Hubant dit de l'Ave Maria à Paris », in *Bibliothèque de l'école des chartes*, 1948, tome 107, livraison 1, pp. 68-73.

¹¹ オメール・タロン Omer Talon はアイルランド系フランス人で、1510 年ごろアミアンで生まれたとの説があるが生年の詳細は不明。1562 年に病死するまでラムスに忠誠を尽くした。

ま若者たちの注目を集め、ラムスの授業には多くの学生が詰めかけたという。

この成功によって自身の教育方法に手ごたえを得たラムスは、1543年、28歳のとき、初の著作『弁証法の分析 *Dialecticae partitiones*』と『反アリストテレス論 *Aristotelicae animadversiones*』の二冊を同時に世に問うた。スコラ論理学とアリストテレスの批判で埋めつくされたこの二冊は、すぐさま大学の咎めを受けて高等法院にまで訴えられた。5ヶ月にわたる論戦の末、1544年3月1日にフランソワ一世が介入することとなり、問題のラムスの二著作は発禁処分、加えてラムスは哲学を講じることを禁止される事態となった。

こうした逆境におかれながらも、1545年に知人のよしみでブレール学院¹²の校長となると、自分に禁止されたのはあくまで哲学の講義であることを逆手にとり、午前の正規授業の哲学は親友のオメール・タロンにまかせ、自分は午後の特別授業のレトリック講義を担当するという策に出る。タロンに指示して第一作目のレトリック書¹³を刊行させたのもこのころである。1546年10月には「雄弁と哲学の結合 *l'union de l'éloquence et de la philosophie*」をテーマに掲げた公開演説をおこない、「雄弁」すなわち古典講読とレトリック研究を通じてディアレクティックや哲学への新たなアプローチ法を実践において試していた。これを勅令違反とみた大学側がラムスにふたたび攻勢をかけたが、1547年3月31日、当の勅令を発したフランソワ一世が逝去し、アンリ二世（在位 1547-1559）が即位したことで、時代はにわかにラムスに利する方向に動き始める。

ここで登場するのが、ナヴァール学院時代の学友シャルル・ド・ロレーヌである。1547年7月に枢機卿となった彼は、かつて自分が家庭教師をしていたアンリ二世に進言し、ラムスに哲学講義を禁じた1544年のフランソワ一世の勅令を廃止させることに成功するのである。これによって発禁処分となっていた先の二著作も再出版の運びとなり、ラムスはこの機をとらえて次々と、とりわけレトリック関連の新著を発表するなど勢いづくが、これが敵対するスコラ学者たちを刺激した。とりわけパリ大学学長を務め、パリ王立教授団のラテン語雄弁術教授にもなったピエール・ガラン（1510-1559）¹⁴がこのころからラムスに公然と個人攻撃をしかけ始めた¹⁵。さらに1550年にはガランの弟子ジャック・シャルパンチエ（1524-1574）が25歳の若さにしてパリ大学学長

¹² ブレール学院 Collège de Presles はフィリップ四世の秘書ロール・ド・ブレール Raul de Presles によって1314年に創設された。パリのモベール広場 Place Maubert 近くのカルム通り rue des Carmes にあったが、アヴェ・マリア学院同様、1763年にルイ・ル・グラン校に吸収された。

¹³ Omer TALON, *Institutiones Oratoriae*, Paris, Jacques Bogard, 1545.

¹⁴ ピエール・ガラン Pierre Galland の経歴については、Kees MEERHOFF, « Les lecteurs royaux pour l'éloquence latine et la philosophie. De Latomus à Ramus », in *Histoire du Collège de France, I. La Création (1530-1560)*, A. Tuiller (éd.), Paris, Fayard, 2006, pp. 324-328.

¹⁵ フランソワ・ラブレールがこの様子を『パンタグリュエル・第四の書』プロローグにおいて戯画化して描いている。François RABELAIS, *Œuvres complètes, Pantagruel, Quart livre, Prologue d'Auteur*, M. Huchon (éd.), Paris, Gallimard, 1994, pp. 527-529. Claude LA CHARITÉ, « Rabelais était-il ramiste ? La Querelle Galland – Ramus, le solécisme rabelaisien et la dialectique ramiste », in *Dalhausie French Studies*, vol. 85, Winter 2008, pp. 75-93.

に選出される。このシャルパンチエこそアリストテレス主義スコラ学陣営の最右翼としてラムス打倒に全力を注ぐ、恐るべき権謀家となる人物である。彼の差し金で、ラムスが校長をしていたプレール学院の生徒たちは大学学位取得資格を剥奪され、プレール学院での授業も一時中断を強いられる。1551年の初めにパリ大学上級学部（法学、医学、神学部）でラムスの処分について話し合われ、議論は例によって紛糾したが、最終的にほとんどシャルパンチエの一存でラムスに不利な結論が出された。ラムスはこの一件を裁判に訴えたが事態を打開できず、いよいよ窮地に陥った。ここで一度ならず助け舟を出したのが、あのロレーヌ枢機卿である。

ロレーヌ枢機卿はラムスをめぐるこのパリでの騒動を憂い、ふたたびアンリ二世に働きかけて、王立教授団に新たに「雄弁術と哲学の教授ポスト」を創設する約束をとりつけるのである。このポストはじつにラムスのために設けられたものであり、王立教授団の歴史において「雄弁術と哲学の教授」を同時に務めたのは、後にも先にもラムスただ一人であった¹⁶。1551年8月の就任演説には二千人も聴衆が詰めかけ、大盛況を博したという。これに続く八年間がラムスの黄金時代であり、この間に十九点もの著作を発表する多産ぶりで、レトリック書や文法書、および古典古代文芸（プラトン、キケロ、ウェルギリウスが中心）の注釈書とあわせて、ディアレクティックに関する書物も出版していく。1555年にはフランス語版『ディアレクティック』¹⁷を出し、同年それと対になるかたちで同僚のアントワヌ・フークラン（生年不詳-1561）が『フランス語レトリック』¹⁸を発表する。とりわけ前者はフランス語で書かれた初めてのディアレクティック書であり、ラムス主義ディアレクティックの金字塔として名高い。だがこうした冲天の勢いも長くは続かず、1559年にアンリ二世が逝去したところから徐々にラムスの身边に暗雲が立ち込め始める。

蒲柳の質であったフランソワ二世（在位 1559-1560）の即位と同時にギーズ家が政治の舵とりを自由にするなかで、翌 1561 年にシャルル九世（在位 1561-1574）が王位につくと、摂政カトリーク・ド・メディシス（1519-1589）がギーズ家を牽制するため改革派に譲歩する構えをみせ、同年、カトリックとプロテスタントの和解をはかって宗教会議（ポワシー会談 Colloque de Poissy）を開催する。しかしこれは両陣営の思想の違いを浮き彫りにするだけの結果となった。ラムスがカトリックからプロテスタントに改宗したことを公にしたのがこの 1561 年のことである。ポワシー会談における改革派代表テオドール・ド・ベーズ（1519-1605）¹⁹とカトリック派代表ロレーヌ枢機卿のやりとりをみて、ロレーヌ枢機卿の受け答えに失望したのが改宗のきっかけとなったのだという。忘恩甚だしいラムスの行為に激怒したロレーヌ枢機卿は、これによりラムスと完全に

¹⁶ K. MEERHOFF, « Les lecteurs royaux pour l'éloquence latine et la philosophie », *art. cit.*, p. 330.

¹⁷ Pierre de LA RAMÉE, *Dialectique*, Paris, André Wechel, 1555.

¹⁸ Antoine FOUQUELIN, *Rhétorique française*, Paris, André Wechel, 1555. アントワヌ・フークランはプレール学院のラムスの同僚。

¹⁹ テオドール・ド・ベーズ Théodore de Bèze はジュネーヴにおけるカルヴァンの後継者。ジュネーヴ大学初代学長。

袂を分かつ。こうしてラムスは最大にして唯一の庇護者を失い、1562年3月、ギーズ家郎党によるヴァシーの虐殺に端を発する宗教戦争の勃発とともに、歴史の荒波に翻弄されることになる。政情は短期間のうちに大きく左右に振れ、プロテスタントとなったラムスは弾圧を逃れるためにパリの内と外を行き来する生活を強いられる。第一次宗教戦争勃発にともないフォンテーヌブローに避難するが、1563年のアンボワーズの和平でパリに帰還。幸いにしてブレール学院と王立教授団に復職がかない、この間とりわけ数学の研究に没頭するが、1567年の第二次宗教戦争の開始とともにふたたびパリを離れてサン＝ドゥニに退く。1568年3月のロンジュモーの和議によりパリに戻るも、書斎は略奪されたあとだった。ほどなく1568年夏に第三次宗教戦争が始まるとサバチカル休暇をとってスイスとドイツの新教地域を訪れる。これらの地域では行く先々で好意的に迎え入れられるが、母国フランスへの愛着はだれより強く、1570年にサン・ジェルマンの和議になると即座にパリへと舞い戻った。しかしながら、このときすでにパリには教師としてのラムスの居場所はなく、ジュネーヴ大学学長のテオドール・ド・ペーズに教授ポストを懇願するも断られ、1572年、サン・バルテルミ虐殺事件の3日目に予期せず惨殺された²⁰。

2. アリストテレスからラムス主義へ——ディアレクティックとレトリック——

以上、ラムスの劇的な生涯について縷々述べてきたが、ラムスのパリ大学学芸学部改革はその浮沈の激しい全生涯をつうじた学問的闘争のなかで編まれ、試され、修正を重ねながら逆風に晒されて実践されたものであることがよくわかる。時系列的には、まず1545年から1559年にかけてレトリックに関する著作が主に出版され（第一段階）、1555年から1565年の十年間はディアレクティック改革と「方法」概念の形成・練磨に力が注がれ（第二段階）、1566年以降の宗教戦争のさなかにおける数学研究への集中の時期を経て（第三段階）、晩年の宗教的考察の深化へと至る（第四段階）²¹。注目したいのは、ラムスにおいてはレトリック改革がディアレクティック改革に先立っているという点である。これは1544年のフランソワ一世の勅令により、ラムスに対して哲学（ディアレクティック）講義が禁止された事実もおおいに関係しているはずだが、こうした学問的制限のなかでこそ古典古代のレトリック理論を見直す機会が得られ、それが結果として伝統的ディアレクティックの再検討にもつながったことは確かだろう。以上の観点から、通常ラムス研究というとそのディアレクティック改革と方法概念の特質解明に集中しがちだが、本稿ではこれまで研究が比較的手薄となっていたラムス主義レトリック改革の内容とその意義に重心をおいて論考を進める。

まずはアリストテレス論理学の整理から始めよう。アリストテレスの論理学的著作群の全

²⁰ これはサン・バルテルミの虐殺事件に偶然巻き込まれてのことではなく、あくまでラムス個人が狙い撃ちされた結果である。その無残な最期については、Ch. WADDINGTON, *op. cit.* pp. 254-257.

²¹ この4つの区分はW. J. ONG, *Ramus, Methode and the Decay of Dialogue*, New York, Harvard University Press, 1955, pp. 30-32による。

六巻は「オルガノン」と総称され、第一巻『カテゴリー論 *Categoriae*』、第二巻『命題論 *De Interpretatione*』に続いて、第三巻・第四巻『分析論（前書・後書） *Analytica*』は論証論理学に、第五巻『トピカ *Topica*』はディアレクティックに、第六巻『詭弁論駁論 *De Sophisticis elenchis*』は詭弁術に充てられていることは周知のとおりである。これに対して『弁論術 *Rhetorica*』は通常「オルガノン」には含まないとされるが、もともと「オルガノン」という著作群自体がアリストテレスの死後に注釈家たちによって紀元後6世紀ごろにまとめられたものであり、『弁論術』は「オルガノン」に含められることがあったり省かれたり、その位置づけは曖昧なものとなっていた²²。とはいえ、ディアレクティックとレトリックとがアリストテレス自身によって非常に近い関係におかれていることは事実であり²³、近年の研究動向²⁴を参照しつつ、以下、「オルガノン」全六巻に『弁論術』を加えたかたちで考察を進めることとする。

論証論理学、弁証術、弁論術、詭弁術の四つの領域から成り立っているといえるアリストテレス論理学は、それぞれが学問に必要な「道具（オルガノン）」として体系づけられ、互いに関連し合いながらも、互いに区別し合う領域を与えられている。その区別に際して、アリストテレスはこれら四領域が土台とする「前提」の違いを明示する。まずは論証論理学とディアレクティックとを比較して、論証論理学は真にして第一の前提から出発するもの²⁵、ディアレクティックは蓋然的前提ないしは通念（エンドクサ）から出発するもの²⁶と規定する。ここで、必然的、非人称的、非時間的前提に立つ論証論理学こそが唯一アリストテレスのいう「論証」の名に値することになる。残る三領域、すなわちディアレクティック、レトリック、詭弁術は、多かれ少なかれ「蓋然性」と関連があるとみなされている。ディアレクティックもレトリックも「蓋然的前提」から出発するが、前者は真理の探求を目的とし、後者は受け手の同意や承認を目的とする点で区別される。対して詭弁術に関連する争論的な議論は「一般に認められているように見えるが実際にはそうではない前提」²⁷、すなわち「見かけ上蓋然的な前提」から出発するとされ、いわば「まやか

²² 『アリストテレス全集1』、山本光雄、「訳者解説（「オルガノン」『カテゴリー論』『命題論』について）」、岩波書店、1971年、141-144頁。

²³ 「弁論術は弁証術と相応ずる関係にある。というのは、両方とも、扱う対象がある意味で一般性があり、誰でも知ることができ、特定の専門知識を全く必要としない、といった類のものだからである」、アリストテレス、『弁論術』、戸塚七郎訳、岩波文庫、1992年、22頁（1354 a）。

²⁴ Fernand HALLYN, « Dialectique et rhétorique devant la « nouvelle science » du XVII^e siècle », in *Histoire de la rhétorique dans l'Europe moderne (1450-1950)*, M. Fumaroli (éd.), Paris, P.U.F., 1999, pp. 601-603 ; Chaïm PERELMAN, « Logique, dialectique, philosophie et rhétorique », in *L'Empire rhétorique : Rhétorique et argumentation*, Paris, Vrin, 2000 [1^{ère} édition 1977], pp. 17-25.

²⁵ アリストテレス、『トピカ』、村治能就訳、『アリストテレス全集2』所収、岩波書店、1970年、3頁（100 a 28-30）。

²⁶ 同書、100 a 31。

²⁷ アリストテレス、『詭弁論駁論』、宮内璋訳、『アリストテレス全集2』所収、岩波書店、1970年、370頁（165 b 7-8）。

しのディアレクティック」である。以上から、どの領域もディアレクティックと何らかの係わりをもっていることがわかる。同時にこれら近接領域の間の入り組んだ関係が、のちのち、それぞれの間に混乱を生んだともいえる。

アリストテレス以後、ヨーロッパ中世においてディアレクティックは「形式論理学」と同義となり、哲学といわず神学といわず、あらゆる議論の場で数ある規則を巧みに操り相手を打ち負かすことを目指す「論争術」と化した。このように中世スコラ学において単なる推論の形式操作の遊戯に墮してしまっただけのようなディアレクティックを痛烈に批判したのがルネサンス人文主義者たちであり、そのとき彼らが見直しを訴えたのが、ディアレクティックと同じく古典古代より伝わるレトリックの効用であった。パリでヨハネス・シュトゥルム（1507-1589）²⁸のディアレクティック講義を聴いて感銘を受けたラムスもまたルネサンス人文主義の薫陶を直に受けている。ルドルフ・アグリコラ（1444-1485）²⁹以来、フィリップ・メランヒトン（1497-1560）からヨハネス・シュトゥルムへと受け継がれてきたルネサンス期のディアレクティック・レトリック改革の流れにあって、ラムスとその協力者たちはパリ大学内部から、中世以来の伝統的学問の改革を唱えたのだった³⁰。

ラムスらの目指すところは、アリストテレスのオルガノン理論に内在していた各学問領域の相互浸透から生じる混乱の源を、文字どおり根こそぎにすることであった。ラムスによれば、論理学とディアレクティックはともに本質的に「認識の術」である以上、「ひとつの同じ教授内容をもつもの」として扱われるべきであるとされる³¹。その上で、精神・認識の領域に属するディアレクティックと、表現・伝達の領域に属するレトリックが明確に区別される。加えて、弁論術として体系づけられた古典レトリックの五部門の構成の見直しもまた重要な作業となる。ここでもまた「精神・認識／表現・伝達」の二元論が適用され、第一部門「発想 *inventio*」、第二部門「配置 *dispositio*」、第四部門「記憶 *memoria*」はいずれも精神の作用に関わるものとしてディアレ

²⁸ ヨハネス・シュトゥルムは1530年から1537年までパリの王立教授団でディアレクティックを講じていた。その内容はルドルフ・アグリコラのディアレクティック理論の大きな影響下にあるものであった。1527年以降パリに滞在していた若きラムスはシュトゥルムの講義を直接聴いている。K. MEERHOFF, « Les lecteurs royaux pour l'éloquence latine et la philosophie », *art. cit.*, p. 332.

²⁹ ラムスにおけるアグリコラの影響については、René RADOUANT, « L'union de l'éloquence et de la philosophie au temps de Ramus », in *Revue d'Histoire Littéraire de la France*, n° 31, 1924, pp. 161-192.

³⁰ アグリコラ、メランヒトン、シュトゥルムらと異なり、ラムスらはパリ中心部に身をおき、伝統的スコラ学の牙城であったパリ大学を直接攻撃したために、風当たりもそのぶん強いものとなったとの見方もある。R. RADOUANT, *ibid.*, p. 188.

³¹ « Car bien que les choses cogneues soyent les unes nécessaires et scientifiques, les autres contingentes et opinables, si est-ce toutesfois que tout ainsi que la veüe est commune à veoir toutes couleurs, soyent immuables, soyent muables, ainsi l'art de cognoistre, c'est-à-dire Dialectique ou Logique, est une et mesme doctrine pour apercevoir toutes choses (...) », in Pierre de LA RAMÉE, *Dialectique* (1555), M. Dassonville (éd.), *op.cit.*, p. 62. (下線強調筆者)

クティクに割り当てられ、残りの第三部門「措辞 *elocutio*」、第五部門「口演 *actio*（ないしは発声 *pronuntiatio*）」の二つのみがレトリックに属すべきものと定められた。この構成は 1548 年のオメール・タロン版『レトリカ』においてすでに認められる。まず「措辞 *elocutio*」は「転義 *trope*」と「文彩 *figure*」の二つに、そして「発声 *pronuntiatio*」は「声 *vox*」と「身振り *gestus*」の二つにそれぞれ分岐させられ、最終的に 1567 年のラムス版『レトリカ』において「一般から個別へ」と進む「二元論的図式化」の方法が徹底的に適用されて、ラムス主義レトリックの完成形をみることとなる³²。このようにレトリックの領域が大幅に狭められ、極度に単純化されたことで、近代以降顕著となる、ジェラルド・ジュネットのいう「制限されたレトリック」³³の流れへと向かう端緒を開いたとされる。

ところでラムスのレトリック理論について言及される際、一般に「ラムス主義レトリック *rhétorique ramiste* / *Ramist rhetoric*」という表現が用いられる。これは上述のレトリック改革がラムス一人の手になるものではなく、共同作業の産物だからである。最大の貢献者はラムスの思想に忠実に理論構築をおこなったオメール・タロンであり、また、アントワヌ・フークランがフランス語版レトリック書の執筆に一役買ったことについては、先のラムスの生涯の記述のなかで触れたとおりである。

3. ラムス主義レトリックの評価をめぐる——オングとメールホフ——

それではこの「ラムス主義レトリック」は研究者たちによってどのように評価されてきたのだろうか。代表的な研究として筆頭に挙げられるのが、ウォルター・オングの『ラムス、方法、そして対話の衰退』（1956）³⁴である。これは『声の文化と文字の文化 *Orality and Literacy*』（1982）で知られるオングが、若き学究生活の十年間を費やして仕上げた博士論文である。このオングの研究書の特徴は、ラムス主義批判の観点から書かれている点にある。オングはラムス主義レトリック改革の評価に際して「失敗」という強い表現を用いることも辞さない。「レトリックを印象的な表現と伝達へと新たに分割したというこのことこそが、ある種の失敗の証しでもあろう」³⁵と。その理由として、第一に、こうしたレトリックの二元論的整理によって、声と聴覚に関わる「発声 *pronuntiatio*」がラムスの視覚的図式的説明様式から逃れ出ていること、第二に、「措辞 *elocutio*」という言葉の装飾機能に特化されたレトリックは定義と分割という手続きを通じてますます幾何学的配置をもって組織されたことが挙げられる。こうしてラムス主義レトリック

³² ラムス主義レトリックの変遷過程については、Kees MEERHOFF, *Rhétorique et poétique au XVI^e siècle en France. Du Bellay, Ramus et les autres*, Leiden, E.J. Brill, 1986, pp. 175-330 参照。

³³ Gérard GENETTE, « La rhétorique restreinte », in *Recherches rhétoriques*, « Communication, 16 », Paris, Seuil, « Points / Essais », 1994, pp. 234-253.

³⁴ W. J. ONG, *Ramus, Methode, the Decay of Dialogue*, « Chapter XII : Ramist Rhetoric », *op. cit.*, pp. 270-292.

³⁵ *Ibid.*, p. 273 : « This new division of rhetoric into striking expression and delivery would prove a kind of failure, too. »

は空間化と視覚化へと突き進み、活版印刷の普及も手伝って、近代における書かれた言葉と視覚の優位、および話された言葉と聴覚の軽視の傾向が決定づけられたとするのがオングの見解の趣旨である。

このオングの研究に大きな疑問を投げかけたのがキース・メールホフである。『16世紀フランスにおけるレトリックとポエティック』（1986）のなかで、メールホフはオングの見方を「極めて偏向的だ *des plus tendancieuses*」³⁶と語気を荒げる。そして、ラムスとその協力者たちは決して「口演 *action*」理論を軽視してはいないし、ディスクールの音声的特長の意義を過小評価してもないと主張する³⁷。たしかにラムスらは、フランス語の音声を可能なかぎり忠実に転記することを目指して綴字法の改革³⁸にも意を注いだし、また、もともとギリシア語やラテン語で書かれていたレトリック理論をフランス語の実態に照らして捉え直そうとした際に顕わとなる韻律面での決定的な違いにも極めて意識的であった。メールホフが試みたのは、碩学オングによっていささかバランスを欠いた扱いのなされたラムス主義レトリックの内実を、できるだけ僻することなく描き出すことであった。メールホフはレトリック関連の著作を年代順にひとつひとつ見ていく³⁹。

1544年のフランソワ一世による勅令で哲学講義を禁止された翌年の1545年にまずはタロンがラテン語で『弁論家の教育』⁴⁰を出版し、キケロとクインティリアヌスの著作における「措辞 *elocutio*」に関わる事項の整理を主におこなったのち、ラムスが1547年と1549年にそれぞれ『ブルータスの問題』⁴¹と『クインティリアヌスにおけるレトリックの区別』⁴²を出してキケロとクインティリアヌスのレトリック書をあからさまに攻撃し、それを乗り越えようとすることでラムス主義レトリックの土台を築く。1551年にラムスが王立教授団でも教えるようになってからは、フランス語のためのレトリックをフランス語によって記述することに強い関心が向けられる。1555年にフークランが公刊した『フランス語レトリック』は1548年のタロンによるラテン語版『レトリカ』⁴³の翻案であるが、タロンが引き合いに出すのはもっぱら古代ローマ詩人であるのに対して、フークラン版では例文の多くが同時代のフランス人の作品、なかでもピエール・ド・ロン

³⁶ K. MEERHOFF, *Rhétorique et poétique au XVI^e siècle en France*, op. cit., p. 176.

³⁷ *Ibid.*, p. 176.

³⁸ 小方厚彦、『16世紀フランスにおけるフランス語とフランス語観—Ramusの研究—』、関西大学出版広報部、1972年。とりわけ「IV. Ramusの綴字改革」37-108頁。

³⁹ ラムスとその協力者たちの著書の諸版本へのアクセスには、W. J. ONG, *Ramus and Talon Inventory*, Cambridge, Massachusetts, Harvard University Press, 1958が有用である。メールホフもこの文献目録を高く評価し、しばしばこれに依拠している。

⁴⁰ Omer TALON, *Institutiones Oratoriae*, Paris, Jacques Bogard, 1545.

⁴¹ Petrus RAMUS, *Brutinae Quaestiones*, Paris, Jacques Bogard, 1547.

⁴² Pertus RAMUS, *Rhetoricae Distinctiones in Quintilianum*, Paris, André Wechel, 1949.

⁴³ Omer TALON, *Rhetorica*, Paris, M. David, 1548.

サルやジョアシャン・デュ・ベレーといったプレイヤッド派詩人の詩句を引用している点が画期的であった。1557年にはタロンがフークラン版をラテン語に翻訳したかのような体裁で『レトリカ』⁴⁴を書く。ラムスは1559年にラテン語で『古代ガリア人の慣習』⁴⁵を執筆するとすぐにそれをフランス語に翻訳⁴⁶させるが、ラムスはそこでフランス語の起源としてのゴール語の系譜を辿り、その正統性を主張してゴール語レトリックの顕揚をおこなうなどして言語に関する考察を深めた。1562年に盟友タロンが没してから5年後の1567年には、みずから筆を執り『レトリカ』⁴⁷を書きあげた。メールホフは、この1567年版について、ラムスが用語上の曖昧さを退けることに成功していること、および、最大限に適用された二元論的図式化においてその体系の結構にはかえって力強さが生まれていることを認める。さらに、ラムスがフランス語の起源をラテン語ではなくゴール語に求めたことで、ラテン語にはあってフランス語にはない長短の「韻律 *numerus*」支配の観念から解放され、キクロに由来しない「リズム *rhythmus*」という用語の採用によってフランス語の散文に固有の新たなレトリックの創造に貢献したのだという。これこそが、古代ギリシア・ローマ以来の「自由学芸という魔術的円環 *le cercle magique des arts libéraux*」を打ち破ることを可能にしたのだと⁴⁸。

ラムス主義レトリック改革を評価する際、メールホフの指摘のとおり、ラムスが俗語のもつ新たな価値に格別の注意を払ったことは特筆に価する。16世紀半ばまでのレトリック書の一般的性質として、ラテン語に特有の言語現象を前提とした体系と語彙使用から脱せずにといたという事実があり、また逆説的にフークランの『フランス語レトリック』でさえもまだラテン語レトリックのカテゴリーに囚われていた。それに対してラムス自身が俗語としてのフランス語に固有の諸特徴に目を向け、それにふさわしい新たなレトリック体系の構想を打ち出したことの意義は強調されるべきだろう。そして、こうしたラムスらの試みを経て数十年後ようやくにして、ルネ・デカルトがフランス語で哲学書を執筆することになる。「フランス語で初めて」と俗にいわれるこの実践が、ラムス同様、先立つ学問的権威——ここでもまたアリストテレス＝スコラ学——への失望とそれを一蹴しようとの目論見とともにあったことは、ラムスとデカルトとの間にあるかもしれない類縁関係の解明へと研究者をたびたび駆り立ててきた。ラムスとデカルトの間に影響関係は認められるのか。ラムスはデカルト思想の先駆者なのか。以下ではこうした問いをめぐる代表的な先行研究の検討を通じ、この問題に関する研究の進捗状況を確認したい。

4. ラムス主義とデカルト——その影響関係——

⁴⁴ Omer TALON, *Rhetorica*, Lyon, Thibaud Payen, 1557.

⁴⁵ Petrus RAMUS, *Liber de moribus veterum Gallorum*, Paris, André Wechel, 1559.

⁴⁶ *Traité des meurs et façons des anciens Gauloys, traduit de Latin de P. de la Ramée par Michel de Castenau*, Paris, André Wechel, 1559.

⁴⁷ Petrus RAMUS, *Rhetorica*, Paris, André Wechel, 1567.

⁴⁸ K. MEERHOFF, *Rhétorique et poétique au XVI^e siècle en France*, op. cit., p. 314.

まずはラムスとデカルトとの直接的な影響関係であるが、これについてはいまだ解明されていない。たとえばオランダ人研究者ベルケルによる「オランダにおけるデカルトの先駆者、ラムス」(1987)⁴⁹という論文では、ラムス主義が隆盛を極めた16世紀後半から17世紀初めのオランダにおいて、当時レイデン大学数学教授であったルドルフ・スネル(1546-1613)とイサーク・ベークマン(1588-1637)との師弟関係に光が当てられている。このルドルフ・スネルは、光の屈折に関する「スネルの法則」で知られるヴィルブルド・スネル(1580-1626)の父親であり、ルドルフはラムス主義に魅了されて思想的にも大きな影響を受けた。このルドルフ・スネルの直弟子であったイサーク・ベークマンが師の影響下で機械論的思想を練りあげ、そのベークマンの思想がデカルトの自然学の構想に影響を及ぼしたにちがいないという見方がこの論文の趣旨である。

たしかにこの「ラムス—スネル—ベークマン—デカルト」の系譜は非常に興味深いのだが、かといってその影響関係が何らかの文書・資料によって実証できるわけではないのが実状である。この点についてはデカルト研究者のビュゾン⁵⁰も疑義を呈している。ビュゾンの調査では、デカルトによるラムスへの言及はデカルト書簡中に二箇所見出されるのみであって⁵¹、それらはいずれもコレージュ・ロワイヤルにおけるラムスの名のついた数学教授ポストに関するものであり⁵²、ラムス自身の思想や方法に立ち入った言及はデカルトの著作・書簡全体を通じて見当たらない。したがって、デカルトのテキストからラムスの直接的な影響を証明することは現に不可能な状態だといわざるをえない。たしかにラムスにおいては、デカルト思想を喚起する用語や主題が散見されるが、そこから不用意に思想的な連続性を探ろうとすると、解釈に偏りが出てしまうことのほうが多くなるようである。たとえばアンドレ・ロビネは、ラムスの『ディアレクティック』(1555)

⁴⁹ Klaas van BERKEL, « Ramus, précurseur de Descartes aux Pays-Bas », in *Septentrion. Revue de culture néerlandaise*, 16/2, 1987, pp. 30-36.

⁵⁰ Frédéric de BUZON, « Mathématique et dialectique : Descartes ramiste ? », in *Les études philosophiques*, n° 75, 2005, pp. 455-467.

⁵¹ *Ibid.*, p. 456.

⁵² デカルトによるラムスへの言及は次の二箇所である。Pour le Candidatus de la chaire de Ramus, je voudrais bien qu'on lui eût proposé quelque question un peu plus difficile, pour voir s'il en aurait pu venir à bout : comme par exemple celle de Pappus, qui me fut proposée il y a près de trois ans par M. Gol(ius), ou quelqu'autre semblable. (Lettre de Descartes à Mersenne, avril 1634, AT, I, 288 ; 下線強調筆者) ; Hic autem peto a Domino Fermat, nec non a Domino de Roberval, (& quidem praecipue ab hoc ultimo : cum enim occupet Cathedram Rami, tenetur ex officio ad eiusmodi quaestiones respondere, vel ista Cathedra se indignum esse debet fateri), [...]. (Lettre de Descartes à ***, 18 décembre 1648, AT, V, 257 ; 下線強調筆者) コレージュ・ロワイヤルにおける数学教授ポストはラムスによって創設された。なお、デカルトのテキストの引用は『アダン・タヌリ版 デカルト全集』: *Œuvres de Descartes*, Ch. Adam et P. Tannery (éds.), Paris, Vrin/CNRS, 13 vols., 1963-1973 [nouvelle présentation ; rééd. en petit format, 1996] に拠る。略号(ATまたはFA)・巻数(ローマ数字)・頁数および行数(アラビア数字)の順に記す。綴字は近代書法に改めた。

とデカルトの『精神指導の規則』(1628?) とに共通してみられる数学的概念の演繹的方法の適用に注目し、ラムスとデカルトの思想の「類縁性」を指摘しようとしたが⁵³、ビュゾンにいわせれば、このロビネの研究はラムスのテキストへの正確な参照が少なく、デカルトのテキスト内部にとどまったコメントに終始しているにすぎない。デカルトの数学理論とディアレクティックの関係をめぐるビュゾンの論文の詳細はここでは省略するが、ロビネの議論を向こうに回して最終的にビュゾンが出した結論は、「マテシスという伝統的概念にラムスが与えた変化は、デカルトがそれに与えた変化とはあらゆる点で対立的だ」⁵⁴ というものであった。

5. デカルトにおけるレトリックの位置づけ

ラムスとデカルトとの間の直接的な影響関係を認めることが困難である以上、両者のレトリック理論ないしはレトリック観の間に何らかの影響関係を想定することもまた困難である。このことを念頭において、以下ではデカルト自身が論理学やディアレクティックとの関係においてレトリックをどのように評価していたのかを、デカルトのテキストを通じて見ていくことで、ラムス主義レトリック改革との対比を試みたい。

レトリックに対するデカルトの立場は、『方法序説』「第一部」にみられる「本当らしくあるにすぎない事柄のすべてをほとんど偽とみなした」⁵⁵ との有名な文言からも知られるように、基本的に「反レトリック」の側に立つものである。「本当らしいもの」、すなわち「蓋然的であるにすぎないもの」はいずれも「真理の探求」を妨げるものとして可能なかぎり排除していこうとするデカルトは、その哲学的思索の初期段階においてすでに「蓋然的なもの *les probabilités*」への苛立ちを隠さない。『精神指導の規則』「規則第二」はその全体が「蓋然的知識・認識」の批判に充てられているともいえる。ここでデカルトは「蓋然的にすぎない知識をすべて斥けること」と「完全に知られ、それについては疑いを容れない知識以外もまた信ずるべきではないこと」とを対置して⁵⁶、「蓋然的知識」に対する否定的見解を表明する。そして、「精確に論証されるべき幾多の命題に関して、学者たちは蓋然的にしか論じることができなかった」⁵⁷ と咎め、そうした学者たちは「何かを知らない」と告白するなどということは学あるものにはふさわしからぬと信じ込み、

⁵³ André ROBINET, *Aux sources de l'esprit cartésien : l'axe La Ramée – Descartes, de la Dialectique de 1555 aux Regulae*, Paris, Vrin, 1996 および A. ROBINET, « L'axe La Ramée-Descartes : position dans la règle IV et de la *Mathesis universalis* », in *Descartes et la Renaissance*, E. Faye (éd.), Paris, Champion, 1999, pp. 67-76.

⁵⁴ F. de BUZON, *art. cit.*, p. 467.

⁵⁵ [...] je réputais presque pour faux tout ce qui n'était que vraisemblable. (*Discours de la méthode*, AT, VI, 8)

⁵⁶ Atque ita per hanc propositionem rejicimus illas omnes probabiles tantum cognitiones, nec nisi perfecte cognitis, & de quibus dubitari non potest, statuimus esse credendum. (*Regulae ad directionem ingenii*, AT, X, 362)

⁵⁷ [...] ad innumeras propositiones [...], de quibus illi [=litterati] hactenus non nisi probabiliter disserere potuerunt. (*Ibid.* ; かぎカッコ内補足筆者)

みずからの虚構の学説を粉飾することに慣れている」⁵⁸ だけであるとして、当時の学問の現実を憂えるのである。

学問の実践におけるこうした悪しき傾向の温床となっているのが、デカルトによればスコラ学における「三段論法 *les syllogismes*」の形式的使用である。そしてデカルトは「ディアレクティシャンたちの諸規則のすべてを放棄する」のだという。続けて、「というのも、それらの規則によって彼らは人間理性を支配しているとみなしており、彼らがいくつかの議論の形式を課している間、それらの形式はたいへんな必然性をもって結論を導くため、それに頼る理性は、たとえ少々おのれの推論を明晰かつ注意深く注視することを怠っても、それでもやはり形式の力によって確実な結論へと辿り着くことができる」⁵⁹ からだと述べる。つまり、ディアレクティックの諸規則はそれが本来的に有する形式の力のみで否応無しに何らかの結論を導き出すことができるが、それは人間理性のあずかり知らぬところで発動する自動機械のからくりのようなものだ、ということである。そのような場面においてデカルトがなにより懸念するのは、この議論の形式そのもののつ力が極端に突出し、結果として生じる思考の形骸化と思索行為そのものの忘却である。デカルトの言葉を借りれば、「それらの推論の鎖を用いている人びとがそれに絡めとられたままでは、真実はしばしばそれらの鎖の外にすり抜けてしまっている」⁶⁰ のである。このあとデカルトの批判は鋭さを増していき、ついに三段論法とそれに依拠するディアレクティックとディアレクティシャンは、詭弁ないしは詭弁家同然とまでみなされる。「いかに巧妙な詭弁でも純粋な理性を使用している人びとを欺くことはほとんどないが、詭弁家自身を欺くことが常であることをわたしたちは経験する」⁶¹ と断じる際のデカルトの皮肉な調子はほとんど最高度に達しているといえるだろう。

このようにして、もはや詭弁と同一物であるとされたディアレクティックは、デカルトにおいて「論理学」ともまた同義とされていることが『方法序説』『第二部』の一節から明らかとなる。「まだ若かったころ、哲学の諸部門のうちでは論理学を少し熱心に学んだ。(中略)しかし、それを検討して次のことに気づいた。論理学は、三段論法にしる、他の部分の教則にしる、未知のことを学ぶのに役立つのではなく、むしろ既知のことを他人に説明したりするのに役立つだけ

⁵⁸ Et quia crediderunt indignum esse homine litteraro fateri se aliquid nescire, ita assuevere commentitias suas rationes adornare, [...]. (*Ibid.*, AT, X, 362-363)

⁵⁹ [...] omittamus omnia Dialecticorum praecepta, quibus rationem humanam regere se putant, dum quasdam formas disserendi praescribunt, quae tam necessario concludunt, vt illis confisa ratio, etiamsi quodammodo ferietur ab ipsius illationis evidenti & attenta consideratione, possit tamen interim aliquid certum ex vi formae concludere : (*Regulae ad directionem ingenii*, AT, X, 405-406)

⁶⁰ [...] quippe advertimus elabi saepe veritatem ex istis vinculis, dum interim illi ipsi, qui vsi sunt, in iisdem manent irretiti. (*Ibid.*, AT, X, 406)

⁶¹ [...] atque experimur, acutissima quaeque sophismata neminem fere vnquam, pura ratione vtentem, sed ipsos Sophistas, fallere consuevisse. (*Ibid.*)

であり、そればかりか、ルルスの術のように知らないことを何の判断も加えず語るのに役立つだけだ⁶²。ここでいわれる「論理学」は「三段論法」の学習と不可分のものであったことがわかる。実際、イエズス会学校の論理学の授業では、おもにアリストテレスの『命題論』と『分析論前書』の抜粋と要約、およびトピカと詭弁にまつわる諸概念などが学ばれていた⁶³。したがって「論理学」という名で呼ばれていても、その内実はディアレクティックと変わりがなかったということである。『方法序説』のこの箇所についてデカルトみずから『ビュルマンとの対話』のなかで補足しており、そこでは「(当の論理学とは) むしろ、あらゆることがらについて論じ立てることをわたしたちに教えるディアレクティックのことであり、あらゆることがらに関する論証を与えてくれる論理学のことではない」⁶⁴といわれている。これは、学校で実際に学ばれている「論理学」と名のついた学問がもはや本来の役割から離れて、論争術としてのディアレクティックとなりはてしている実態を喚起するのにじゅうぶんな指摘である。

論理学とディアレクティックとの間の同等関係がこのようにして明示されるなか、デカルトはそのディアレクティックをレトリックと同一視するまでにいたる。この結論を導き出すまでのデカルトの議論は次のとおりである。「かの議論の方法（すなわちディアレクティック）が真理の認識にまったく何ももたさらないのはなぜかをより明瞭にするために」⁶⁵、まず「ディアレクティシャンたちは、最初にその内容を保持しているのでなければ、すなわち、三段論法の技術によって演繹されるまさにその真なることがらを前もって知っているのではなければ、真理を結論づける三段論法を技術によってはひとつとして組み立てることはできない」という事実をとりあげてそれをスコラ学の陥穽とし、そのせいで、第一に「彼ら自身がこのような形式からは新しいことが

⁶² J'avais un peu étudié, étant plus jeune, entre les parties de la philosophie, à la logique [...]. Mais, en [l']examinant, je pris garde que, pour la logique, ses syllogismes et la plupart de ses autres instructions servent plutôt à expliquer à autrui les choses qu'on sait ou même, comme l'art de Lulle, à parler, sans jugement, de celles qu'on ignore, qu'à les apprendre. (*Discours de la méthode*, AT, VI, 17 ; かぎカッコ内補足筆者)

⁶³ Étienne GILSON, René Descartes, *Discours de la méthode, texte et commentaire*, Paris, Vrin, 1987 [6^e édition ; 1^{ère} édition 1925], pp. 118-119.

⁶⁴ René DESCARTES, *Entretien avec Burman : manuscrit de Göttingen* (2^e édition), Ch. Adam (éd.), Paris, Boivin 1947, p. 116 : « Ea potius est Dialectica, cum doceat nos de omnibus rebus disserere, quam Logica, quae de omnibus rebus demonstrationes dat. »

⁶⁵ 当段落の執筆にあたり、デカルト『精神指導の規則』「第十規則」中にみられる下記の文章を下敷きとした : Atqui vt adhuc evidentius appareat, illam disserendi artem nihil omnino conferre ad cognitionem veritatis, advertendum est, nullum posse Dialecticos syllogismum arte formare, qui verum concludat, nisi prius ejusdem materiam habuerint, id est, nisi eandem veritatem, quae in illo deducitur, jam ante cognoverint. Vnde patet illos ipsos ex tali forma nihil novi percipere, ideoque vulgarem Dialecticam omnino esse inutilem rerum veritatem investigare cupientibus, sed prodesse tantummodo interdum posse ad rationes jam cognitatas facilius aliis exponendas, ac proinde illam [=vulgarem Dialecticam] ex Philosophia ad Rhetoricam esse transferendam. (*Regulae ad directionem ingenii*, AT, X, 406)

らは何も得られないこと」、第二に「通例のディアレクティックは、真なるものを探したいと願う人びとにはまったく無益であるが、すでに知られた学識をより易しく他人に説明するためにただ時おり役立つのみ」といった学問上の弊害がもたらされるのだと指摘する。これらの論拠のうえにデカルトは、「それゆえ、そうした通例のディアレクティックは哲学からレトリックへと移されるべきであることは明らかである」と喝破するのである。

以上に見てきたデカルトの見解をここでいったん整理する。まずはスコラ学で猛威をふるう「ディアレクティック」が「詭弁」と同一視され、「論理学」もまた三段論法の形式的使用に特化されたディアレクティックと同義とみなされた。このディアレクティックは、既知のことがらを三段論法の形式のうえに乗せて他人に巧みに語ってみせるだけの小手先の技術と変わらない。それはすでに真理の探求を放棄してしまっている以上、もはや「哲学」の名には値しない。それゆえ、うまく弁ずるためだけのディアレクティックはむしろ「レトリック」の一分野としてとり扱われるべきだというのが、ここまでの議論の趣旨である。アリストテレス論理学においてそれぞれの役割が定められていた四領域が、デカルトによってこうして一堂に集められ、「論理学」、「ディアレクティック」、「レトリック」、「詭弁」はすべて、うまく語ることを旨とする受け手への迎合の術としてまとめられていることがわかる。ここで断罪の対象となっているのは、こうした弁論の技術の寄せ集めと化していた、デカルトの時代のスコラ哲学である。「哲学」と呼び習わされる営みがすでに哲学ではなくなっているとのデカルトの深い嘆きがそこに見てとれる。巷間の「哲学」は、専門家による言葉の器用な操作に終始する「レトリック」にすぎないのだと。こうして、デカルトはその思索の初期の段階において早くも、レトリック化した既存の学問的枠組み全体に苛立ち、それを根底から突き崩してまったくの更地のうえに新たな学問＝哲学を築くことを目指していたことがわかるだろう。

以上の考察にもとづき、デカルトのレトリック観とラムス主義レトリック改革とを対比してみると次のことがいえる。第一に、ルネサンス期の人文主義者のひとりであったラムスは、16世紀後半当時の主要な学問的手段であったディアレクティック——論理学でもあり哲学でもあった——の改革のためにまずレトリックの改革に乗り出し、そのレトリック改革を起爆剤として新たな学問のありかたを探っていった。それに対してデカルトが「レトリック」という語をもちだす際は、常にそこに侮蔑的な意味合いが込められている。学問のレトリック化を諸悪の根源と見定めることで、レトリックは改革するものではなく最初から根こそぎにすべきものとして捉えられているのである。

第二に、ラムスとデカルトの教育観の違いである。ラムスによるレトリックの二元論的図式化は、アリストテレス、キケロ、クインティリアヌスといった古典古代の著作にみられる曖昧な記述を可能なかぎり排除し、その体系をできるだけ「単純に」示すことで、若い学生たちの勉学の

効率を促すことを目指すものでもあった。また、ラムスは当時の伝統的な大学に対する恐るべき反抗者であったが、自分自身はいくまで大学人として教育の現場に携わる道を選んだ。デカルトの場合はそれとは異なり、20歳でポワチエ大学での勉学を終えた後、それまでに身につけた学問的知識をすべて放棄して旅に出て、そのまま市井にとどまり、大学に職を得ようとはしなかった。デカルトは既存の知識を整理して壇上から教授するのではなく、「炉部屋に独り閉じこもり」⁶⁶、未知なるものを自分自身で発見することによってこそ得られる内発的な喜びの大切さを説く⁶⁷。他人から教わったり、他人を教えたりするのではなく、「自分自身を訓育すること」⁶⁸こそが、デカルトの知的探求を突き動かす原動力であった。これと関連して、デカルトが特定の弟子に従えることがなかったこともラムスとは対照的である。

こうして見ると、殊にレトリックという分野においてはラムスとデカルトとの間の隔たりが明らかになるばかりで、類縁性はまず見出しがたい。ラムスがカトリックからプロテスタントに改宗した1561年ごろといえば、イエズス会が教育を武器としてフランスでの学校開設数の増大をもくろみ、改革派に対する反撃の度合いをますます強めていた時期にあたる⁶⁹。実際このころラムスの教育改革はイエズス会から大きな反感を買っていた⁷⁰。イエズス会の教育プログラムもルネサンス人文主義の理想にもとづくレトリック重視の内容をもつものとして知られるが⁷¹、イエズス会のレトリック教育はアリストテレスからキケロ、クインティリアヌスへといたる古典レトリックの伝統的枠組みの維持のうえに成り立っていること⁷²、また、イエズス会学校ではキケロ

⁶⁶ [...] je demeurais tout le jour enfermé seul dans un poêle, où j'avais tout loisir de m'entretenir de mes pensées. (*Discours de la méthode*, AT, VI, 11)

⁶⁷ Eo me fateor natum esse ingenio, vt summam studiorum voluptatem, non in audiendis aliorum rationibus, sed in iisdem propria industria inveniendis semper posuerim ; (*Regulae ad directionem ingenii*, AT, X, 403)

⁶⁸ [...] je prends beaucoup plus de plaisir à m'instruire moi-même, que non pas à mettre par écrit le peu que je sais. (Lettre de Descartes à Mersenne, Amsterdam, 15 avril 1530, AT, I, 137)

⁶⁹ 1556年、オーヴェルニュ地方のピヨン Billon にフランス初のイエズス会学校を設立。1563年にはパリにクレルモン学院（のちのルイ・ル・グラン校）の設立に成功する。Henri FOUQUERAY, *Histoire de la Compagnie de Jésus en France, des origines à la suppression (1528-1762)*, 5 vol., Paris, A. Picard et fils, 1910-1925, Tome Premier.

⁷⁰ Alfonso Martin JIMÉNEZ, « Ramus et l'université espagnole », in *Ramus et l'Université*, K. Meerhoff et M. Magnian (éds.), Paris, Éditions Rue d'Ulm, 2004, pp. 131-153.

⁷¹ François de DAINVILLE, *L'Éducation des Jésuites (XVI^e – XVIII^e siècles)*, Paris, Minuit, 1978. 拙論「デカルトとイエズス会学校人文主義教育—よく書くために—」、『フランス文学語学研究』第26号、早稲田大学大学院、2007年、29-52頁。

⁷² 1562年に出版され、イエズス会学校のレトリック教科書として用いられたシプリアーノ・ソアレス Cypriano SOARES の『修辞学 *De Arte Rhetorica*』は、古典レトリックの伝統的概念を保持している。月村辰雄、「イエズス会のレトリック教科書—1. ソアレスの『修辞学』」、『フランス文学における私のディスコース』(平成8, 9, 10年度科学研究費・基盤研究(B)(2)による研究成果報告書)、研究代表者：田村毅、東京大学

の美文を模範とした作文練習を生徒たちに徹底して課していたことなどからも、反アリストテレス、反キケロ主義的なラムス主義レトリックとは折り合いがつかない。よって、イエズス会学校出身のデカルトが学校時代にラムス主義レトリックの影響下におかれる機会があったとも考えにくい。デカルト研究者のビュゾンの言葉を借りれば、レトリックという伝統的な体系にラムスが与えた変化は、デカルトのレトリック批判とは「あらゆる点で対立的だ」といえるのではないだろうか。

なお、ラムスとデカルトとの直接の影響関係を実証するのは困難である一方で、デカルト思想の継承者たちとラムス主義との関係を探ることで、間接的にデカルトとの関連を検証する道もある。『ポール・ロワイヤル文法』(1660) および『ポール・ロワイヤル論理学』(1662) にはラムスへの直接の言及がみられ⁷³、また、熱烈なデカルト主義者であったオラトリオ会士ベルナール・ラミ (1640-1615) のレトリック理論におけるラムス主義の影響も指摘されている⁷⁴。ラムス主義とデカルト主義の間隙を埋める作業は、いまま継続と深化が必要とされているのである。

大学院人文社会学系研究科、1993 年、5-15 頁。

⁷³ Antoine ARNAULD et Claude LANCELOT, *Grammaire générale et raisonnée*, Paris, chez Pierre le Petit, 1660, p. 21 : « comme a fait Ramus dans sa Grammaire pour la Langue François, [...] ». Antoine ARNAULD et Pierre NICOLE, *La Logique ou l'Art de penser*, Paris, chez Charles Savreux, 1662, p. 24 : « c'est vne chose entierement ridicule que les gehennes que se donnent certains Auteurs, comme Ramus & Ramistes, [...] ». Wilbur Samuel HOWELL, *Logic and Rhetoric in England, 1500-1700*, « Chapter 6-I. Descartes and the Port-Royalists », New York, Princeton University Press, 1956, pp. 342-363 ; Geneviève CLÉRICO, « Ramisme et post-ramisme : la répartition des 'arts' au XVI^e siècle », in *Histoire, Épistémologie, Langage*, tome VIII-1, 1986, pp. 53-70.

⁷⁴ W. S. HOWELL, *op. cit.*, « Chapter 6-II. Bacon, Lamy, Hobbes and Glanville », pp. 378-382.